総括

永原恵三

本分科会は、日本の音楽・芸能において多様なジャンルを横断してあらわれる「道行」をとりあげ、物語の進行における時間的空間的な移動の表現を多角的に検討するものである。今回は、平家、能・狂言そして説教節を例にして、それぞれのなかで「道行」がどのように表現されているか、について、音楽構造、音楽様式あるいは言葉との関わりなどといった視点から捉えることが試みられた。

まず、薦田治子氏は道行と道行文との区別を先行研究から明確にすることによって、まず「道行」の定義を音楽との関係から行なった。その上で、平家における道行の音楽構造について、〈海道下〉を例にして分析的呈示がなされた。次に、奥山けい子氏は能・狂言における道行について、その音楽的様式をそれぞれ類別化しながら呈示した。能においては物語の展開すべき土地に到着するまでの過程を述べる小段、物狂いの登場の段などが、それぞれ「高砂」、「三井寺」を例にして呈示された。最後に時田アリソン氏は中世から近世にかけて盛んだった説教節について、その残された文字テクストのなかにオーラルな語り芸の性格をみとめる。説教一般は「旅」が中心となった長い「道行」が多く、それを語る旅芸人たちのつらい人生の反映、メタファーである点などが示された。

以上の発表に対して、徳丸吉彦氏から次のような総括的なコメントがあった。まず、日本文化にとっても道行が長い歴史をもっていること。時代を下ってみれば、たとえば明治の鉄道唱歌もそうだし、歌謡曲などで、ある特定の地域から別の場所へ移動することを歌ったものも一つの道行のかたちである。次に、平曲と能においては道行が音楽的に特殊ではない、ということは興味深いこと。歌舞伎や文楽などの近世邦楽では、道行の場面は音楽的にもかなり変わっていて、たとえば三味線の音高や旋律などにみられる。それは演出にも反映していて、華やかさの助長とそれに対して、道行のあとに来る悲劇との対照を示唆することにもなっているのではないか。さらに、世界的規模でもアフリカやアラブ世界、オセアニアなどに陸地や海を移動する際の歌があり、人間の移動と音楽とが本質的に結びついた例がみられ、いわば音楽的地理学とでも言うべきことになっている。

この他に民俗芸能との関連で山車を引くときの囃子を道行という場合があるとの指摘があり、薦田氏より、道行と旅とは本来同じ意味の言葉で、人の移動に伴う音楽や芸能も道行といい、舞楽での登場も道行という。従って、民俗芸能でもそうした音楽を道行ということもある、とのことであった。

以上のように「道行」は文化のさまざまな側面のなかで、人間の時間的空間的移動の表現として多様な姿で立ち現れてくる。そして本質的には「旅」とつながっている。旅は名所めぐりや巡礼など、ある目的に向けての旅路を歩むことでもあると同時に、生きることと死ぬこと、この世とあの世という、この切り離すことのできない二つの世界の間の旅路を示すこともある。確かにわれわれは常に旅人かもしれない。その様々な人生のシーンを語りあるいは音楽として歌い奏でるのであろう。そこに「道行」の持つ多様性と底知れぬ深さとが見え隠れするように思われるのである。